# 平成29年度　施設実習報告

施設実習担当　初等教育科　中村廣光
保　育　科　飯田法子

平成29年度の施設実習は、児童養護施設・障害児施設をはじめ、保育所以外の各種児童福祉施設や知的障害者施設等45施設で実施した。

施設実習は、１年間の事前実習指導と10日間の実習、半年間の事後指導によって構成される。短大で学んだすべての教科・活動がこれらのプロセスの中に統合的に活かされるよう教職員は細心の配慮をしている。

日常生活における言葉遣いや態度といった社会人としての基本となるマナー学習、各種書類や実習日誌、報告書の作成指導を通じたわかりやすくて正しい文書の書き方の学習、実習中の子どもや障害者の方への適切な支援の在り方の学習などを通して、対人援助の専門職として多岐にわたる知識・技能・態度を身につけることができるよう指導・支援を行った。

＊

１．実習先　　大分県内　　44施設　県外１施設
　　初等教育科　140名　保育科　45名

２．実習期間　　初等教育科：１期　平成29年　８月16日～８月26日
　　２期　平成29年　８月30日～９月９日
　　保　育　科：１期　平成29年　２月27日～３月９日
　　２期　平成29年　３月13日～３月24日

３．実習の意義・目的

大学で学んでいることを具体的な現場体験を通して理解するとともに、身につけた専門知識や技術を実際の実習体験の中で統合化し、深め、応用力を身につけるとともに、現場で得た知識を持ち帰って研究することにより、自己の保育者・支援者としての意識や福祉観・人間観を養う。

４．実習施設の様子

いずれの施設においても将来の有為な人材を養成する立場から、懇切丁寧に実習生の指導をしていただき、本学教員も各施設を巡回して実習生の状況把握や激励・指導を行った。学生も、施設職員や本学教員の指導・支援を受けながら着実に実習を行うことができた。

５．施設実習を担当して

今年度は特別なトラブルや事故などなく、どの学生も貴重な現場体験をした旨の報告が提出された。実習開始時点でそれぞれが設定した実習課題は実習の中で、あるいは振り返りの授業等を通じて達成され、多くの実りがあった。

## 施設実習を終えて

初等教育科２年　大川　祐美

私は今回「遊びを通して行う療育」という研究テーマを立てて実習を行い、二つのことを学びました。

一つ目は『遊びを通し地域に出てからも困らない子どもを育てる』ということです。例えばルールのある遊びでは必ずルールを守るように促します。地域に出た後、障害を持っている子どもも、障害を持っていると知らない人にとっては普通の子どもです。そこでルールを守る習慣が身についていないと、そのことが原因でトラブルに発展してしまうかもしれません。なかなかできなくても妥協せずに、繰り返し行っていくことが大切だということが分かりました。一人一人の子どもの姿をよく見て、その子どもにとってどのような力が不足しているのか、そしてそれを補うためには、どのような支援が必要になるのかを、保育者全員で考えていくことが重要だと思いました。

二つ目は『褒めることの大切さ』です。褒めることが大切であることは以前から知っていましたが、障害を持つ子どもは自尊感情が低い傾向にあることが非常に多いため、特に大切であることを学びました。保育者の関わり方次第で、子どもの気持ちは大きく変化します。遊びの中で、褒められることをたくさん経験し、子どもが自尊感情を高めていくことができるように、関わり方を学んでいきたいと思います。

施設実習を通し、遊びの重要性を改めて実感することができました。また、一つ一つの遊びに対して、自分なりに考察した意図やねらいと、先生方が考える意図やねらいを照らし合わせながら取り組むことができ、とてもたくさんの学びを得ることができました。

就職してから、今回の実習で学んだことを生かし、子どもにとってより良い遊びを提供していけるように頑張っていきたいです。

## 施設実習を終えて

初等教育科２年　詫摩　かおり

施設実習では様々なことを学ぶことができました。理念を元に利用者の方１人１人に寄り添った対応をすることや、遊びを通して自立心を育む活動を行うことなどです。

なごみ園では、児童から成人の方まで幅広い方々の支援を行っていました。毎朝、担当を決め、１対１で支援を行う形式で、家庭での状況や休日の様子など様々な要因を考慮して、職員同士コミュニケーションを取りながら情報の共有を行っていました。

私は、実習中に１対１で支援を行う際に、どのような特性を持っていて、どのような対応をすればよいのか職員の方から教わりながらかかわりました。対応する際に「とにかく寄り添って、利用者さんにとって充実した時間を過ごしてもらいたい」と思っていました。

実習５日目に知的障がいと肢体不自由を持つ方の支援をすることになりました。Aさんは音楽が好きで、用意してあるキーボードに内蔵されている曲をずっと聞いて過ごします。Aさんが楽しく、心穏やかな時間を過ごしてもらえるように言葉かけをしたり、同じ動きをしたり、同調するように心掛けました。Aさんが好きな曲、その時の気分に合う曲の時は、体を左右に動かし、手拍子をして声を出しました。その時に「この曲好きですか？」「海の中にいる感じの曲ですね」など言葉かけをしました。そして、実習中に２度、Aさんの支援をさせて頂きましたが、Aさんに会うのが最後の日、Aさんの送迎に行くことになりました。Aさんは、私の姿

を見るなり、声をあげ、体を左右に揺らし、うれしそうにしてくれました。その瞬間、Aさんに寄り添い支援したいという私の気持ちがしっかり伝わっているように思え、施設で働きたいと強く思いました。

たった10日間の実習でしたが、大学では学ぶことのできないことをたくさん学ぶことができました。

## 施設実習で学んだこと

初等教育科２年　岡　　夏美

私が今回の施設実習で学んだことは、相手とコミュニケーションをとることの大切さです。

私が行った実習先は、障がい児デイサービスの施設と18歳以上の大人の利用者の方のデイサービスの施設が併設された所です。最初の３日間は子どもの施設で実習をおこないました。障がいのある子どもと関わるのは初めてのことだったので、とても緊張していました。しかし、いざ接してみると、基本的には保育園などで今まで一緒に遊んできた子ども達と変わらず、遊ぶことが大好きで、笑顔で接してくれました。そんな中で、障がいの関係で、うまく話すことができない、言葉を発することができない子もいました。その子が何を言いたいか、何を伝えたいのか汲みとることが大変でした。

次に大人の利用者の方の施設に実習に行った際、自分が想像していたよりも利用者の方の言動がわかりにくく、正直どうしたらいいのか分かりませんでした。ほとんどの利用者の方が「あー」や「うー」などの言葉を発し、うまく喋ることができていませんでした。その利用者の方々とどのようにコミュニケーションをとればよいのか、最初は分かりませんでしたが、実習を重ねていくうちに、自分が相手を理解しようという気持ちをしっかり持ち、相手の今の状況や思いを考えながら、笑顔で接することが大切だと分かりました。言葉のやりとりが難しい分、相手の気持ちや状況、視線など、言葉とは別の表現を通じて理解しようとすることの大切さを学びました。

私は今回の実習では、相手を理解する、気持ちに寄り添うという、コミュニケーションをとるうえで１番大切なことをあらためて学ぶことができました。この学びを、職場だけでなく、人との日頃からの関わりの中でも活かしていきたいです。

## 施設実習で学んだこと

初等教育科２年　平野　愛莉

私は恵の聖母の家という重症心身障害者施設に実習に行きました。そこで最重度の利用者さんがいる病棟への配属になりました。その棟にいる利用者さんは身体の変形も大きく、殆どの人が寝たきりで言葉も話せません。私は最初その身体に触れることも直視することもできませんでした。一日中寝たきりで人と話すこともできず、チューブでしか食事を摂れない利用者さんを私は「何を幸せに思って生きているのだろう」と思ってしまいました。

しかしある保育士の方が、動くことも自発呼吸もできず寝たきりの16歳の少年の手を撫でていました。その方は「この人は視力も聴力も無くて感情も出せないけど手を撫でてあげると情緒が安定するんです」と教えてくれました。それは、ほんの２、３分の出来事だったけれど私の障がい者への見方は大きく変わりました。

「この人たちは幸せなのか」と思ってしまっていたのは私が自分の幸せを基準にしていたからでした。遊べなくても、おいしいものが食べ

られなくても、私たちにとって小さなことが利用者さんにとっては大きな幸せなのかもしれないと思いました。

それから、私は毎日利用者さん一人ひとりに話し掛けに行きました。するとある日から利用者さんは私の姿を見ると微笑んでくれるようになりました。会話はなく、殆ど私の一人言のようだったけれどそこには確かにコミュニケーションができていました。そのことに私は涙が出るほど嬉しかったです。

この実習で私は“人のために働く”ということを学びました。自分を基準にせず相手のために何ができるのかを考え支え続けることはとても大変です。しかし利用者さんの笑顔を見たとき他の何にも変えられない幸福感がありました。人のために働く幸せを学んだ実りの多い実習になりました。